

抵抗の領域における邂逅

——出会い損ねる主体の詩学から——

阿部小涼

政治的なものとはどこにあるのだろうか？ どうやってそれを掴み、指し示し、交渉し、変革するのか？

——プレント・ヘイズ・エドワーズ Brent Hayes Edwards, *The Practice of Diaspora : Literature, Translation, and the Rise of Black Internationalism* (Cambridge : Harvard University Press, 2003)¹⁾

人間の生（エグジスタンス）が想像的なものという環境のなかでつねに営まれているとすれば、いつまでたっても、人間の生はこの環境のそとへ決定的に出ることがありません。……したがって「現実的なもの」と「想像的なもの」は、互いに互いの反対物であるわけではないということになります。逆に、ふたつを切り放すことはできません。

——エティエンヌ・バリバル²⁾

はじめに³⁾

喫緊の問題として、日米軍事再編に対してどのような抵抗を企むか。これが現在もなお私の目前に突きつけられている難題である。再編の物語としての「沖縄の悲願」「沖縄の負担軽減」などの修辞に抵抗するのは、「負担軽減ではない」と明言すること、「パトリオット」配備を米国に感謝する日本政府高官の発言に、「愛国者、しかしだれのための？」と問い返すことを通じて実践可能な、言説を奪い返す闘争にはかならない。多くの議論は、論争の体をなしているように見えて、かえって支配的イデオロギーを強化していることが多い。ローカル化の暴力に抗し、アイデンティティ・ポリティクスやセクト主義の陥穽を超えて、階級・アイデンティティ・性・大学キャンパスの政治を顕在化させ、それらの運動をつないでいく、紡いでいく必要がある。

わたしたちは抵抗の領域を捉える困難さのなかに生きている。

関門海峡というロケールが持つ通過する場のイメージを豊かに喚起しながら、「労働者」という主体になり損ねる「労務者」としての朝鮮人労働者を描こうとする小野俊彦、野宿者のテント村を、空間を奪還する祭りや畑、行為する身体の所作から理解・獲得される抵抗の知という領野に読み替える途を示した原口剛、いずれも、こうした抵抗の空間、瞬間を捉え、その政治学を引きずり出そうとする奮闘であった。

ふたりの研究の関心はそれぞれに幅広く筆者自身の問題関心と共振しあう点が多かった。なかでも、抵抗の領域とはどのように現在の日常のなかに感知され歴史のなかに見いだされるの

かというセッションの起点となった問い、そして同時に私自身の問題設定として次に連なる問い、その抵抗の領域で「他者」と、「われわれ」はどのように邂逅し対峙するのだろうか、これらの問いを共有するものとして示唆に富んでいた。

どこかに存在しているらしい「弱者」を救済すべく立ち上がるのが左翼知識人のミッションなのだと、希望と宿命に燃えて旅をした青年たちの過去はとうに過ぎ去った。「他者化」するものとされるものという二分法のなかで自分は果たしてどちらの側に立っているのか責め立てるまことしやかな議論と、実存を手がかりに表明することからしかそれに応えられないのが誠実さであるかのような応答が横溢しているように見える昨今、である。「良心的日本人」とか「観光左翼」などの文言がその偽悪的態度を度外視しても甘受せざるを得ないと受けとめられてしまう、その言説構造自体に潜む権力性を不問にしないやり方で、アクチュアルな抵抗の臨界を切り開くことは可能だろうか。

本稿は、清田政信という詩人の文章を入り口として、なんとか沖縄の現在における抵抗の詩学（それは、しかしディシプリンとしての文学を超えて音の領域、アートの領域）へと架橋する、見よう見まねの試みである。アンリ・ルフェーブルを手がかりにしながら、「まったく手をつけられていない扱ひにくさを伴う、直接に生きられる空間、随伴する映像と象徴にまで拡張する空間」としての表象の空間こそが、『対抗空間』、すなわちまさしく従属的な、周辺的なし周縁化された位置どりから生じる支配的な秩序に対する抵抗の空間が発生するための領域となる⁴⁾と定義したエドワード・ソジャにならって、抵抗の領域を、芸術の潜在的な洞察が住まう表象の空間としてとらえ返すことから始めてみようと思う。あるいは、セネガルのミュージシャン、バーバ・マールを引用しながらウィルソン・ピケットをリスペクトし、深夜という時間こそが現在を見つめ直し何をなすべきか思索するための時間なのだというジョージ・リブシッツ⁵⁾のスタイルで、闇を見つめる詩人の声を、世代を超えてヒップホップ・カルチャーに引き寄せてみようと思う。

失語の時間、眼のゆめみる伽藍

さだめし百年の歴史も一瞬に生きる垂直な思念がきみの体に深まるのはこんな場所だろう。

清田政信⁶⁾

いまだ未聞の一つの言語への約束の中で？昨日は聞き取れなかったたった一つの詩への？

ジャック・デリダ⁷⁾

沖縄の詩人、清田政信とその作品についてはこれまでに恐らくそれほど多くが語られてきたわけではない状況がある⁸⁾。『琉大文学』に属した後、自らを1960年代の詩人と規定し、シュールレアリズムの影響色濃い、政治への介入に意識的な作品を生み出し続けてきた詩人の一人である。また文芸評論、美術評論にも鮮やかに切り込む才覚を示した。その清田政信の詩から始めてみよう。前の世代の運動の挫折に対する失望、喪失感、敗北を生きる詩人は、その心的状況をしばしば、言葉の喪失、不在、宙づりとして言表してきた。

敗走のはてに何かを言おうとすれば
必ず何かを失う
失う意識の終わるところが旅立ちのはじまり
「内言語」⁹⁾

だがきみは不在のまなざしになって
宙づりにされている
「家郷への逆説」¹⁰⁾

このような失語は、かつてならば、その対局としての雄弁や饒舌に抱く疑念として表現されてきたと言える。「サヴァルタンは語るができない」というガヤトリ・チャクラヴァルティ・スピヴァクの端的にしてなお乱反射する定義を持ち出すまでもない。しかし清田の詩において、それはもう少し次元の異なるものとしてとらえ直されてよい。

詩は言葉であることにおいて、すでに世界であることをこぼみ得ないし、思想であることを否定できない。しかし詩が世界にとって換わることはできないし、思想にとって換わることは卑劣ですらあるのだ。詩は実在と人間の会話になることはできないかもしれないが虚の中に世界を実現しようとする意志であり得る。そして詩人とは生活の空白の中にく物>を顕現させる反逆の、秩序の外の人間なのだ。¹¹⁾

『琉大文学』誌上で、美術批評の体裁を取りながらそのエッジの立った詩論をものしていた清田は、自らの置かれた状況をいかなる言葉によって表現するのか、その方法論に執着し続けた詩人だと言ってよい。「だから、ぼくらの時代は、<物>が、個々の人間の心情の不定型を系列の網目に位置づけするのをさかさ突きくずしながら、既存の定型を超えて、言葉を組織するだろう」¹²⁾と青年らしい高邁さで宣言する思索の足跡として、その後の清田の詩を再読することは、あながち的外れではないように思えるのである。

深夜の海に風が立ち ぼくは何を告発しようとする？
季節になづむ潮騒に洗われ そぎおとされる絶望の肢体は
闇にゆれる地平線の青みに溶けかかる

絶望は ぼくらのまぶたを溶かしてしまう
ものたちのまろみを映さない視野は
いまだに ひとたちの日課の歪みに似ているので
深夜の渚をたたいて
ぼくは どうして波でないのか 展ける波頭の
あわだち分けて 船首であればいいのに
ひとに語りかけることばが 寒気の中でいてつき

ひとたちの顔が同じ形になってぎこちない日
ささげる唇のかたちで われはじめる暁の逆襲を呼ぼう

素朴な叫びよりもさりげない
はるかな暗号のようにひびき合うことばを
こころの破片だけをひろいあつめるしぐさに
とらわれがちなぼくらは のっぴきならずつぶやけるか
希望が てんでに背負う重荷にひとしい
昼のにぎわいも いまは ねむりの形をえらぶ
「深夜の海に風が立ち……」¹³⁾

深夜の海，地下の喫茶店，閉じた目蓋のなか，眠りの時間，そのような時間と場所こそが，彼の詩が語られる空間としてある。失語を，矛盾するようであるが，饒舌に語る，そのような契機あるいは領域としての反日常的な（シュールリアルな？）時間が，選ばれているのである。

まず距離を取れ 係累にそむけ
必敗を期して きみ 自身を包囲するには
さしあたり それで充分だ
世界は柔らかい部分から徐々に蝕っていくようだが
人たちは何もこわせない思考を恥じてはいけない
まずしくても きみらの思考を
狂気のとば口までつれていかねばならぬ
私は今 人たちの出はらった居酒屋にいる
人たちが帰るところがあるように
言葉で渴き 言葉を生きる者は
沈める街のピアノの音にたたかれながら
吃音の発端に佇ってみることだ
お別れだ！ きみもまた都市のめししいの一隅で
目を閉ざしさえしたら
失墜に充分の高さは確保できるわけだ
私は雨にずぶ濡れ渴きもいやせずに
緑いきづく部屋へ向かって急いでいる
「薄明の訣別」¹⁴⁾

ついさっきまで楽しげで活気あふれていた居酒屋のはずが今はもう誰の姿も見えない失われた場所，ずぶ濡れていても渴きやまないという矛盾，そのような場所に出し抜けに出現するかのような「狂気のとば口」「吃音の発端」こそは，清田にとって新しい言語のための臨界点だったのではないか。

言語がアイデンティティ認識と分かちがたく傷痕となって来た沖縄の詩人の失語の表現を、言葉はあらかじめ失われているという命題に思い至ればそれを抵抗の契機に再解釈することが可能となるとするデリダの考察に重ねて考えてみるのは、見当はずれではないはずだ。『たった一つの、私のものではない言葉』は、1992年にルイジアナ州立大学でエドゥアール・グリッサンらが組織した会議での発表を元に1996年刊行されたものである。このなかでデリダは考え至る。「すなわち、私は一つしか言語を持っておらず、しかもそれは私のものではない。私の「固有の」言語は、私にとって同化不可能な言語である。私の言語、みづからが話すのを私が聞いており、話すのが得意なたった一つの言語、それは他者の言語なのである」¹⁵⁾と。

仮に、たとえば、記憶喪失と失語症の奥底から出発してみづからの同一性を画定することを、あるいは<私>と言うことを私に可能にしてくれるものについてのアナムネーシスを書くことを私が夢見ているとしても、私には同時に分かっているのだ、自分にそうすることができるだろうのは「ママ」、ただ不可能な一つの道を切り開くことによるのみ、すなわち、ルートを離れることによって、逃亡することによって、自分自身を置き去りにすることによるのみ。¹⁶⁾

デリダにおける不可能な一つの道、ルートからの離脱、ディアスポリックな逃走は、自分自身を置き去りにすること、主体の絶対的な決定から身を引きはがすこととして説明される。清田においても、主体という語こそ選ばれなかったとはいえ、<個人性>という語を手がかりとして、主体との対峙と相似する命題を抱えていたと看取できるのではないか。

ナショナリティのおらびともいえる「島ぐるみ」土地闘争の、分裂と退潮期に詩を書きはじめた60年代は、連帯を信じられない地点から書きはじめている。また土着のおらびそのものは、即自としては、思想にはなりえないという、いわばみづからの存在の基底を掘りすすむことによってしか、他者は発見されないという困難をかかえこむところから出発している。

60年代の詩人は自らの内にうずくまることによってひとつのひろがりをも所有しようとする方法を身につけた人たちだといえよう。[中略] 谷川雁が、感受性から変わらないと革命はおこらない、といったことばと向き合う形でぼくらを内省させた。感受性の中にも思想があり、存在の革命はそれをおいては考えられないというぼくらの思想はそこから生まれた。ぼくらは詩を言葉の問題として考え、言葉こそがぼくらの反日常性を思想の違法性として立たしめる根拠だということがわかった。¹⁷⁾

清田における<個人性>を、「政治とかかわりながら、可能なかぎり<個人性>を深化しようとする意志」「<個人性>を掘りすすんで他者に語りかける思想」などの表現によって同時代の詩人たちを評価するところにも現れているように、個人を哲学的に追求することによって再び政治に接合しようとする意志と読むならば、清田にとっての言葉の領域は、主体を問い直す作業

であったと見る事が出来るのではないか。

あるいは、もうひとつの手がかりとして、何を見るか、その眼差しの向かう先によって自己の立ち位置に再考を迫るかのような、視界・視覚を脱構築するような語彙に注目してもよい。「現代に生きるほくらに思想を保証してくれる《民衆》などどこにも存在しているはずがないし、真に民衆にであうには、民衆から遠く背くことが必要だ。内部に向かう眼の深さだけが外部を撃つ強さになるのだ」¹⁸⁾。清田の言葉に頻出する目蓋、網膜、頭蓋、それらは常に自己の内部に向かう視線を捉えている。「夜」の「反日常」を、「昼」のまなざしから分離すること、閉じた眼の網膜はそれを映し出すスクリーンとして作用することに、清田は十分に自覚的であったのではないだろうか。

言葉に昼がくれば役割を生きる物たちの移動だ
 陽の直射にうめく南ではまなざしは奪われ
 熱がみがきあげる鏡の淵を闇に
 閉ざしたうちなる視野を開花する
 眼は見えるというだけですでに物たちの悪意に侵されている
 眼が潰れても眼のゆめみる伽藍に
 初発のまなざしが光と相姦して血に染まり
 わが言葉の種子が破裂する
 「いたましい序曲」¹⁹⁾

はなはだ頼りない、ややもすれば強引な読みではあるが、ひとつの根拠として、ここではまなざしと眼との分裂からアルチュセールの「主体」を解釈する酒井隆史の興味深い箇所を引用しておこう。

スクリーン (écran) とイマージュ (image) の重なり合う場所を注目しよう。眼の側に帰属するイメージとまなざしの側に属するスクリーンとが交わることで、そこを一種の(イデオロギー的)「視覚的分節」の場所であるとして読むことが出来る (Silverman 1992, p.150)。スクリーンには、文化的、社会的表象が投射されており、私たちは模倣／擬態 (mimicry) によってそれを受動的に引き受けることで、それらの(「イデオロギー的」)表象をわがもの(イメージ)と考える(現実効果と主体効果)。しかし主体はこの模倣あるいは同一化によって完全にイデオロギーの主体となるわけではない。[中略]人間の主体のみが自らが存在とあらわれに分裂していることを知っているのであり、それゆえ「あらわれ」(スクリーン)の機能を分離できる。[中略]存在とあらわれの分裂は、人間にとってのチャンスでもあり、そこにある種の(歴史主義の考えることのできない)ポリテクスの可能性も生まれてくるだろう。²⁰⁾

「閉ざしたうちなる視野」「眼が潰れても眼のゆめみる伽藍」は清田にとっての反逆、秩序の外、思想の違法性の時間、「完全にイデオロギーの主体となるわけではない」チャンスとしての

ポリティクスの可能性の開かれるところであった。イデオロギーの呼びかけに応じると見えてトラブルを引き起こしながらずれていくところに抵抗の領域、抵抗の可能性をつかもうとしたバトラーにも通じる、と論じるのはいささか性急であろうか。

コラボレーションとコンフリクト、生じなかったものの系譜学

1960年代の末に翻訳刊行されたフランツ・ファノンの著作集『地に呪われたる者』に添えられた「月報3」に、詩人、長田弘の「シュールレアリスムとブルース」²¹⁾という小品が掲載されている。長田は、エルドリッジ・クリーヴァーが、その著作『氷の上の魂』²²⁾のなかで、レオポルド・サンゴールやエメ・セゼールに対するジェームズ・ボールドウインの批判に激しく反撥していることを紹介しているのであるが、その重層的な文脈において長く気にかかる文章であった。

ボールドウインは、1956年にパリで開催された第1回黒人作家会議に参加し、その報告のなかで「セゼールは喋ることのできない人々に代わって喋ったのだ」、「セゼールの演説は、植民地としての体験の、一つの大きな結果を無視してしまった。それは、まさに彼のような人間たちを作り出したという事実である」²³⁾との困難な批評を行う。この批評を捉えてクリーヴァーは自著のなかで、「ボールドウインの鼻先は、アフリカにではなく、……義理の祖国としたヨーロッパの方向に永遠に向けられている」「ボールドウインがどうやら忘れていたらしいのは、セゼールが、聖火にせよ劫火にせよ、火は燃えるのだと説いていることだ。ボールドウインの場合、火は彼の顔から黒を焼き取ることは出来なかったが、彼の精神からはたしかに黒を焼き取ったのだ」と激しく非難したのである。

長田は、このクリーヴァーの論難を紹介しながら「セゼールの演説にたいするボールドウインの苛立ちをそのままただちに『精神からはたしかに黒を焼き取った』という結論に飛躍させた、その性急な断罪の姿勢」に、瞠目するというのだ。長田によるボールドウインのテキスト理解の微妙さはここではおく²⁴⁾。さらなるテキストとして「ほくもまた、／アメリカなのだ。」というラングストン・ヒューズの詩に引き付けながら、長田は、黒いアメリカ人というアンビヴァレンスがヨーロッパでアフリカと邂逅する際の「根源的な対立と本質的な相互浸透のイメージ」を見いだしているのである。

『氷の上の魂』を読みながらわたしは、クリーヴァーのボールドウインにたいする激越な批判のうちに、こうしてネグリチュードの実存と黒いアメリカ人の実存とがラディカルなしかたでひきよせられ、むきあわされているのを感じ続けていた。おそらく、ここにアモルフにしめされる黒いアフリカと黒いアメリカの出会いと対峙にこそ、やや先走っていえば、わたしたちの世紀がこれから直面すべき最大の出会いと対峙の原型が看取されるのではないだろうか？ [中略] 黒いアフリカと黒いアメリカのありうべき根源的な対立と本質的な相互浸透のイメージは、わたしに、おそらく今世紀にのこされているもっともスリリングな芸術の言葉の変革の可能性を鋭く予期させずにはいない。それは、シュールレアリスムとブルースの原本的衝突と融合がつくりだすだろう新しい言葉だ。²⁵⁾

「私が言いたいのは、現在女性たちが試みている国境横断的な性格の組織化には、先駆者たちがいるということです」²⁶⁾。1990年代に「協働と紛争にあるウィメン・オブ・カラーの研究のための調査集団 (Research Cluster for the Study of Women of Color in Coalition and Conflict)」と命名された研究グループで活動したアンジェラ・ディヴィスもまた、労働者としての黒人女性を歴史的に再発見するためのオルタナティブな場としてブルーズに注目していることは単なる偶然ではないだろう²⁷⁾。そして、国境を超えて形作られる抵抗の場をナイーブに「出会いの場」として定義するのではない、「コアリション」と「コンフリクト」の両義性のなかに看取しようとする意図が、ここでさしあたって注目すべき点である。

ブレント・ヘイズ・エドワーズは、その著書『ディアスポラの実践』¹⁾において、まさにそうしたコンフリクトを抵抗の実践として理解し評価しようと試みた研究者のひとりである。『ブラック・マルキシズム』²⁸⁾のなかでセドリック・ロビンソンが追求した黒人のラディカルな伝統の「存在論的な全体性」「知識人の形成体 (formation)」という「直観」を、あるいはステュアート・ホルの「帰還ではなく差異を通して、本質や純粋さではなく、必要な混血性と多様性を認識し、差異にもかかわらずではなく、差異とともに生き、差異を通して生きるようなアイデンティティ概念」²⁹⁾を、エドワーズは、「ブラック・インターナショナリズム」の理想に燃えてパリに集ったブラック・ディアスポラたち、アフリカ人とカリビアン、そしてアフリカ系アメリカ人との間の齟齬、誤訳、ズレという契機から探り当てようと試みる。そのひとつが「デカラージュ (décalage)」という語の概念としての導入である。ギャップ、時差、時間差、時差ぼけなどに翻訳されるこの語自体が「英語に翻訳することの困難なフランス語の語彙」であり、時間と場所の差異、裂け目を示しているとエドワーズはいう。

脚の長さが違うテーブル、傾いた本棚みたいに、ディアスポラも、ディスコース的に支柱を加えて「人種的な」出自を「均等な」「バランスのよい」状態に加工することが可能である。しかし、このようなレトリックや戦略や組織化の支柱は、常に統一やグローバリズムを分節化 (articulation) し、様々な目的によって「動員される」が、決して最終決定ではないもの、つねに人工的に補填されたものである。この点で、デカラージュはディアスポラの「人種的」形成体の構造に固有のものなのであって、その返答として起こる離断 (disarticulation) ——誤解、不信感、不幸な翻訳——は、不可欠につきまとうものとして理解されなければならない。³⁰⁾

ラディカルな黒人のインターナショナリズムにおける協働 (collaboration) は、論争と軋轢、あらゆるレベルのデカラージュ (出身国という背景からジェンダー、言語、個性に至るまで) に対峙せざるを得ない。しかしつねに地平を共有しているという観点に立っているのである。その集合を「団結 (solidarity)」と呼ぼうが呼ぶまいが、この地平の別の名前は、政治的なもの (the Political) である。協働とはその臨界点に至る奮闘のこと、[中略] 別の言い方をすれば、協働とは、調和の下にではなく、なにか生産的な不協和音の下に共に歩む努力をたゆまぬことである。³¹⁾

自身の著作に対する批評に応えるかたちで書かれた論文の題名「協和音の小石（pebbles of consonance）」とは、バルバドスの詩人エドワード・カマウ・ブラスウェイトの詩集からの流用³²⁾であることを明かしながら、エドワーズは、「すなわち、フランス語から英語に、アフリカからカリブに翻訳されたものとはなにかをうまく説明するならば、差違を分節化する叙法（mode）、あるいは、「小石」を剥奪の紋章から抵抗の原則に変貌させる統語論的な（syntactic）方法という言い方が当てはまるだろう」と述べる。ブラック・ディアスポラという表現こそ用いていないが、長田が予見した「おそらく今世紀にのこされているもっともスリリングな芸術の言葉の変革の可能性」は、ステュアート・ホール、ポール・ギルロイに始まるカルチュラル・スタディーズの論客たちによって精緻に議論され、エドワーズが「ディアスポラの実践」として描いたようにポストコロニアルな主体化の過程における「根源的な対立と本質的な相互浸透」として理解されてきたものであった。

政治はどこで起こっているのか。抵抗の領域におけるこのような邂逅、政治の場、臨界点を探し出す作業は、ロビン・D・G・ケリーが言うような「歴史的想像力」を必要とする作業となるだろう。換言するならば、それは系譜学、じっさいには有意に起こらなかった系、敗北のなかに痕跡を読む作業であり、詩学の領域をこそ、政治に召還しなければならない。

到来=生しなかったものの系譜学のために、そしてその出来事は不在だったということになるだろうし、歴史を成すものの中にはそれ自体の否定的な痕跡の数々しか残さないものの系譜学のために発明されたのであってみれば、そのような最初以前の言語は存在しない。それは序文、《foreword》、失われた起源の言語ですらない。それは、到来のあるいはむしろ未来の言語、約束された文、すなわち、ここでもまた他者の言語、だがそれも、支配者ないし植民者の言語としての他者の言語とはまったく別の言語である——時としてこの二つの言語が、混乱を惹き起こすかくも多くの類似点を、秘密のうちに保持しあるいは予備として残しながら、互いのあいだでつげ知らせしているにもかかわらず。³³⁾

清田が詩人として立つ吃音の発端、何かを言おうとすれば何かを失う地点は、近代化の火をまんまと盗み取ったつもりで近代に馴致された被植民者に過ぎなかった饒舌な原住民に対置すべき、再びロマン化された失語ではない、別の表現の領域として読むことが可能ではないか。「狂気のとば口」「吃音の発端」こそは、常に負け続けるしかない邂逅の臨界点だったのではないだろうか。

「到来=生しなかったものの系譜学」のための言語を詩学に求めたいという衝動は、私の脳裏に即座にDUTY FREE SHOPP.とカクマクシャカによる共作「民のドミノ」を呼び起こす、という幾分大袈裟だろうか。この歌は、作り手のひとり知花竜海によれば、コザ暴動のイメージと重ねながらも、じっさいには起こらなかった、想像上の抵抗を描いた作品であるという³⁴⁾。

<知花竜海 [DUTY FREE SHOPP.] >

CH53D型 空から落ちたヘリコプター

焼け焦げたゴムの臭い 飛び散る残骸
まじぐわーListen!

Yeah 感じた未来 その先の先の先まで見えない
捨て石 奴隷Human Rights 思考奪われて何も言えない
金網に絡んだ赤いリボン 滑走路日曜飛ばすラジコン
ありオジーオーバーはどうして耕すの? 金網の向こうのあの土地を

<安村磨作紀 [カクマクシャカ] >

2004 夏の日の事 見上げた空から落ちる炎と
轟音 目掛ける所は学び舎 全てをガラクタに変える花火だ
メディアじゃ日本 燃えてるアテネ 沖縄戦場 南の果てで
起きてる事すら伝えんメディアが 導く結末カクマク目には
外人の為に政府は必死 最果てだからか それは明らか
1972 何年たっても まだまだ増えてく暴行や事故
またまたこれまた協定? 校庭落下のヘリの片付け
笑ったお前が焼き付く 眼球 日本の政府に笑顔でサンキュー

その日は まさかの それだった おお 毎日通ったその場所 カンカン
日照りで 空から殺人兵器が 米軍それでも全然平気
一步の間違え大惨事 だけど 奴等が言うには成功らしい
俺等に今まで ブラウン管 の向こうの世界は現実だ
「人事ではなく、近くにある。 生まれた時からずっと囲まれて、
こんなに近くで笑ってやがった。 基地が偏ったこの島 沖縄
平和、平等と教える教科書 ムカツク位に綺麗な話
兵器に囲まれ 無くした秩序に この島の何を平和と言う」

<知花竜海 [DUTY FREE SHOPP.] >

力で押さえつけた民を 既にもう刷り込まれた神を
何もかも手のひらの上のカジノ・リゾート・企業・ヘリポート
命は基地と隣り泡瀬 ミサイル配備しパイプを這わせ
辺野古・普天間・嘉手納 立てなくなるまでシャブらせたキャンディー 甘めーか?
「真相を！」

<安村磨作紀 [カクマクシャカ] >

今やらないなら 明日も同じだ やっぱり俺等は未来を案じる
群集になって武器持ち襲うさ 国会 政府は話になんねえ
家族が生きてる この島が好きだ 嫌いなモノならハナから知ってる

抵抗の領域における邂逅（阿部）

宜野湾 始まり ゆっくり南下 ゲート突き破り 火をつけ車
ガラスを割ったり 青い眼くるせ うせーたままでは終わらんぜ やった一
言葉も肌とか関係無いやし 基地無いこの島 見てみれ一回
叫んだ暴動 膨れた島中 衝突各地で 収集つかない
事態に発展 押さえる力 威嚇の射撃が 出るぞ自衛隊

<知花竜海 [DUTY FREE SHOPP.] >

Yeah 感じた未来 その先の先の先まで見えない
捨て石 奴隷 Human Rights 思考奪われて何も言えない
ありあり58真ん中偉そうに走る戦車 人が怪我しなけりゃしまびんな？
ドンパチドンパチあまくま 実弾演射 うんじゅくぬまんまでしまびんな？

<安村磨作紀 [カクマクシャカ] >

火力で押される県民達だがそれでも必死に戦う 求めて
希望の光 潰される毎日 それでもいつかと戦う人々
平和の意味すら 摩り替え日常 それすらあまりに実感が無い
意味無し議論で 誰を思うか 肝心な事はまるで分からない
そこに立つガキ 殴った兵隊 青い眼 言葉も通じん 人間
誰かの命令 なのかもしれない 役人、金持ち腐ったあんに
耳まで届かす きっと 誰にも分からん この島の先

<知花竜海 [DUTY FREE SHOPP.] >

Wowwo 猛烈な行動 拳を上げろ 天の腹わたエグろう！
Wowwo 強烈な衝動 引き摺り下ろせ 怒りの民のドミノ³⁵⁾

コザ暴動の記憶を現在に結び合わせる想像力に留まらず、カジノ構想から黙認耕地までディテールに富み、スペクタクルがメディアによってコントロールされるなかでは無力であることを正確に捉えているこの歌詞のなかでは、さらに、米軍再編が取り沙汰され、辺野古に秘密裡に海上自衛隊が派遣される以前から自衛隊が骨がらみに関与していることを見抜き、パトリオットミサイルの搬入の際に国道58号線を我が物顔に米軍兵器が通過したことすら、預言的に示した。ヒップホップというスタイルの採用は、もちろんそれ自体が抵抗するものとしてのシニフィアンであるが、それ以上に、ものすごいスピードで言葉を詰め込むことによるある種の饒舌の実践、訴えるべき現実があまりに多い状況を圧縮した速度で伝えることに成功している。あるいはプラスウェイトの用いた「小石」という表象が、音の連なる飛び石、吃音の音の連打というモードによって、別の詩学の可能性に開かれていることにも言及しておこう。韻律によるテキスト外の表現を採用することで、音の連なりと臨界点の連なりが軋みながら共鳴するさまを捉える歌詞であることが判明するだろう³⁶⁾。

皮膚，境界，交差点

他者との邂逅の場，臨界であると同時に接触点・面を構成するこのような領域はまた，皮膚の隠喩として表現されてきたものでもある。「深化そして再生へ」と題して展示された宮城明の「マグマ」シリーズ³⁷⁾は，薄いアルミ板に傷を付けしわを寄せ孔を穿つなどの加工を加えた連作である。一貫して宮城の仕事に「人間や地球のすべてのものにある境界としての『皮膚』『膜』」³⁸⁾の隠喩を読み取る翁長直樹は，この連作への評価においても，「作品に，傷つけられた身体的な生々しさや，生きている地球，あるいは暴力にさらされ続けてきた沖縄の戦後の歴史を重ねて見てしまうのは不当ではあるまい」という。そして，さらに一步進んで「この作品には，境界としての皮膚の隠喩がある。皮膚は内と外をわかす膜でもあるが，同時に両方に接している。非常に繊細なものであるが，そのために内と外の情報をスムーズに伝え，傷つくとすぐに血が出ることによって告知するメディアでもある」³⁹⁾と指摘し，簡潔ながらも，皮膚から「境界」への思想的接合を果たしている⁴⁰⁾。

まさに，宮城の「マグマ」シリーズに向き合うとき，そのところどころある縫い目のような模様は，繕おうとしても元に戻らない古傷のようにも，辺野古の浜を隔てるキャンプ・シュワブの有刺鉄線のようにも見えてくる。そこに負わされた傷は，縫い合わされ，再びこじ開けられ，なにか別のもので埋め合わせようとするが，治癒するものへの悪いニュースのように唐突に開口（邂逅！）してしまうのである。さらに，そのようにして歪められた版をもとにしたリソグラフが生み出される時，それらは，皮膚に刻印された癒えることのない傷を，もう一つの皮膚としての紙がそこに重なり合いながら写し取る行為，しかし全く同じものを再生することは不可能な実践，そのような境界をめぐる政治学の豊かな暗喩となっているのである。対峙するふたつの側は皮膜の薄い一枚の重なり合うこちらと向こう側の境界をかるうじて構成するが，あいまいで頼りないことに身がすくむような想いに駆られる。壁に展示された傷口を見ながら「それは私の傷だ」と指を指して言うことに似ていて，「それ」はもうすでに私のものではない。ならば自分はこちら側なのか，向こう側なのか，向こう側にいてこちらをのぞき込んでいるのか。

「人は呼びかけられることを通じて主体化という承認と従属の傷を刻印されるが，同時に，人は何者かに何かを呼びかけるとき，やはり不可避免的に傷を負うのではないか」⁴¹⁾。バトラーの理論を巧妙に脱臼させつつ人種表象に重ね書きされていたゲイの行為遂行という領野に呼び込む新城郁夫は，「不可能な呼びかけにおいて，主体化から逸脱していく言葉の運動に巻き込まれていくことを通じて，人は相互承認とは異なる新たな政治抗争に参入することを約束される」と断言する。フェノンの繰り返し引用されるあの箇所から，「ママ，見て，ニグロだよ」と呼びかける子どもの側の被傷性をも読み取ろうという新城は，「このときポストコロナル主体は，被植民者アイデンティティという闘いにおいてのみ設立される固定的な形式ではあり得なく，欲望という政治的契機において常に他者によって多重的に設定され同時に不安定化されるそれじたい疎外的な生の痕跡」であることを，沖縄のテキストにおいてかるうじて掬い取ろうとしている。

その時、呼びかけというイデオロギー装置は、主体の生産に失敗し、その予想不可能な濫喩的政治において、人種とジェンダーの規範的構築と引用反復というサイクルのただなかにおいて、合法性という閥に埋めがたい亀裂を生じさせ始めていたはずである。〔下線は引用者による〕⁴²⁾

清田が「ぼくらの反日常性を思想の違法性として立たしめる根拠」として探し求めた詩の言葉、エドワーズの詩学・史学が切り開く「デカラージ」は、このような邂逅が可能にしたかもしれない過去、実現困難に終わった系譜学への執着として、出会い損なう抵抗する主体のイメージ、いつもそこに居合わせていたのに、有為に出会えなかった抵抗の行為体の歴史学として想起されよう。すなわち、沖縄において想起するならば、それは、アフリカ系アメリカ人兵士と沖縄人との間に見られた抵抗の連帯という系譜学である。土井智義は短いエッセイのなかで、沖縄青年同盟とブランクパンサー党との連帯を、このような邂逅の系譜学のなかに読み取ろうとしている。土井が目論む実践とは、「兵士達が軍隊に所属することによって他者を抑圧する一方で、自らも被傷性を抱えることへの想像力」の発動であり、現在の沖縄においてこそ、そのような「兵士の被傷性を想像すること」が求められているという。

自衛隊をも含めた軍隊の存在を徹底的に拒絶することと、兵士に折り畳まれた被傷性に想像力を行使することを有機的に接続させる実践は、今も有効なことだと思う。兵士の被傷性に思い至ることによって、負傷するという事態のみならず兵士になる過程、つまり人種、階級、移民政策などの軍隊と不可分に接合されている社会構造への視線を鍛えることも可能だろう。⁴³⁾

「人々が非対称性を幾重にも刻印されながらバラバラに分極化していく現況の下で、いかに差別や抑圧をはね返す関係性を紡いでいくのか」⁴⁴⁾という土井の「根源的な抗い」が、「〈基地〉をフェンスの内側に限定するのではなく、那覇新都心の現在を書くことを通して、フェンスの外側も含めた社会編成—軍事占領と不可分に制度化されている社会的諸関係—そのものを問い返すこと」、「フェンスの外側で練り広げられる生活のなかにも軍事力を発見し批判してゆくこと」⁴⁵⁾として、返還された土地に出現した新都心の風景に看取できる支配の進行形の分析に向かい、「県外移設」論がむしろ強化・固定化する非対称の関係性に介入を試み、大阪の野宿者の抵抗を辺野古の抵抗に結び合わせようとする努力へと連なっているのも、こうしてみれば十分に首肯できる思想的営為であると言える。

Year! 青すぎる空になんだか 浮かぶ心と体はなんだば?
Hey! 揺るぎ無い歌はどこだ? 悲しく風吹いてる
鳥はおぼろげに雲を割いてく もう君は戻らぬようだね
僕等 奇跡だったんだ 交差点 それは 日々を彩る光景や
日々によくあるいつもの情景だ ぼんやりと形変えていく世界に
さよなら 歌う時間みたいだ 意味ない事 何もないだろう

ただ 真っ青に広くて高い あの場所で二人の記憶が交差
宝物は置いて行こう 今よりもっと遠い所
一生挑み続ける Life DUTY x カクマク
届かない空に手を伸ばして もう一回 もう一回
「記憶の叫び」⁴⁶⁾

門司港の朝鮮人労務者の歴史に、大阪の野宿者の歴史に、辺野古の抵抗をつなげるのは、奇跡のような交差点、記憶の交差するあの場所、デカラージ、ずれ、誤訳、聞き届けられない呼びかけと返ってこない答え、名指しながら傷つく自己、トラブル、このような頼りないひとつひとつの手がかり、呼びかけられる主体を複雑に錯乱のなかに見つけ出す方法なのである。あるいは、あのときを失われたものとして嘆くのではないやり方、単なる反復ではない現在の意味の置き換え、レプリーゼ (reprise)、必敗を期すこと、敗北に至る直前までのグルーブを直観すること。ここまでたどり着いて、アルチュセール・マラソンのゴールすら見失ったほうほうの体で、バリバールの解釈に傾聴してこの論を閉じようと思う。

ならば、つぎのように説明してみてもどうか。＜想像的なもの＞を、社会＜構造＞の必然的な一側面として当の＜構造＞のなかに導入すれば、革命プラテイクに展開の新しい場を――文化、芸術、さらには、宗教といった場を――開くことになる、と。[中略]「イデオロギー」が作動しているとき、被抑圧者や被搾取者が特に選ばれて、能動的な役割を（少なくとも潜在的に）与えられることになるが、それはなぜなのか。⁴⁷⁾

かくして、古くて新しい螺旋状の問いのなかに、再び自らを投企していくのである。

注

- 1) Edwards, *The Practice of Diaspora*.
- 2) E・バリバール著、福井和美編訳『ルイ・アルチュセール：終わりなき切断のために』藤原書店1994年、230頁。
- 3) 本稿では、マラソン・セッションで展開した議論に直接言及していない。というよりも、セッションの場で語ろうと考えながら不十分だった点や、その場での議論から後に展開してきた思考の足跡を少し活字に起こしてみたいと思う。二人の気鋭の論客は、セッションでの報告の後にも論考を研ぎ澄ませて本誌に掲載されることだろう。本稿は、そういう意味では、どこか間の抜けた的はずれな内容となっているかもしれないことを予めお断りしておかねばならない。
- 4) エドワード・W・ソジャ著、加藤政洋訳『第三空間：ポストモダンの空間論的展開』青土社2005年、88頁。
- 5) George Lipsitz, "In the Midnight Hour: American Studies in a Moment of Danger," *American Studies in a Moment of Danger* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 2001) .
- 6) 清田政信「砂時計」『光と風の対話』思潮社1970年（『清田政信詩集』永井出版企画1975年、148頁）。
- 7) ジャック・デリダ著、守中高明訳『たった一つの、私のものではない言葉：他者の単一言語使用』岩波書店2001年、128頁。

抵抗の領域における邂逅（阿部）

- 8) 例えば、『叙説』〈特集・検証戦後沖縄文学〉15号（1997年8月）；平敷武蕉『文学批評は成り立つか：沖縄批評と思想の現在』ボーダーインク2005年など。
- 9) 清田政信「内言語」『中央公論』1971年6月号（『清田政信詩集』53頁）。
- 10) 清田政信「家郷への逆説」『光と風の対話』思潮社1970年（『清田政信詩集』136頁）。
- 11) 清田政信「《詩論の試みIX》空間凝視」『琉大文学』第3巻第2号（1962年6月）、36頁。
- 12) 清田「空間凝視」、37頁。
- 13) 清田政信「深夜の海に風が立ち……」『遠い朝・眼の歩み』詩学社1963年（『清田政信詩集』271-72頁）。
- 14) 清田政信「薄明の訣別」『詩・現実』13号1980年10月（『詩集・南溟』アディン書房1982年、48-49頁）。
- 15) デリダ『たった一つの、私のものではない言葉』、46頁。
- 16) デリダ『たった一つの、私のものではない言葉』、126頁。
- 17) 清田「沖縄戦後詩史：動乱の予感と個人性への収斂」『現代詩手帖』1972年9月（『沖縄文学全集第17巻評論I』国書刊行会1992年、207・211頁）。
- 18) 清田「沖縄戦後詩史」（『沖縄文学全集第17巻評論I』、205頁）。
- 19) 清田政信「いたましい序曲」『光と風の対話』思潮社1970年（『清田政信詩集』173頁）。
- 20) 酒井隆史『自由論：現在性の系譜学』青土社2001年、208-209頁。なお、引用文中で指示されている文献は、K. Silverman, *Male Subjectivity at the Margines* (London: Routledge, 1992)。
- 21) 長田弘「シュールレアリスムとブルース」『フランツ・ファノン著作集月報3』（第3巻付録）みすず書房（1969年11月）。
- 22) Eldridge Cleaver, *Soul on Ice* (McGraw, 1968, rept. ed., Dell, 1992) [エルドリッジ・クリーバー著、武藤一羊訳『氷の上の魂』合同出版1968年]。
- 23) ジェームズ・ボールドウィン著、黒川欣映訳「黒い王者たちとその勢力」『次は火だ：ボールドウィン評論集』弘文堂1968年。
- 24) 例えば、ボールドウィンのホモセクシュアリティを容認できなかったクリーヴァーのホモフォビア的断罪が背景にあることについて、長田が全く言及していないのは、むしろ不自然である。あるいは、この後1959年にはマルティニクを独立ではなくフランスの海外県として留め置く案に「ウィ」を表明することになるセゼール（その「変節」を厳しく断罪したのは、フランツ・ファノンであった）のその後の経過を考えれば、ボールドウィンの直観は正鵠を得ていたことになる。エメ・セゼール著、砂野幸稔訳『帰郷ノート／植民地主義論』平凡社1997年。
- 25) 長田「シュールレアリスムとブルース」、4頁。
- 26) アンジェラ・デイヴィス「アメリカ合州国における人種、階級、ジェンダーについての考察」（インタビュー、リサ・ロウ）酒井隆史訳『情況』1999年2月。
- 27) Angela Davis, *Blues Legacies and Black Feminism: Gertrude "Ma" Rainey, Bessie Smith, and Billie Holiday* (Pantheon: New York, 1998).
- 28) Cedric J. Robinson, *Black Marxism: The Making of the Black Radical Tradition* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1983; rept. ed. 2000).
- 29) Stuart Hall, "Cultural Identity and Diaspora," in Patrick Williams and Laura Chrisman eds., *Colonial Discourse and Postcolonial Theory: A Reader* (Harvester Wheatsheaf, 1993) [スチュアート・ホール著、小笠原弘毅訳「文化アイデンティティとディアスポラ」『現代思想』(1998年3月)]。
- 30) Edwards, *The Practice of Diaspora*, p.14.
- 31) Brent Hayes Edwards, "Pebbles of Consonance: A Reply to Critics," *Small Axe* 17 (March 2005), p.143.
- 32) 「私の島は小石……小石はそれ以上分割することは出来ない／しりぞけているのは／死。種子も／そ

の冷たい表面に根を張ることはできまい」Edward Kamau Brathwaite, “Pebbles,” in *Masks* (1968).

- 33) テリダ『たった一つの、私のものではない言葉』, 117-18頁。
- 34) 知花竜海はインタビューで「僕は『民のドミノ』で沖縄の現実を淡々と描写しているだけ。だから実は僕はヘリ墜落事件に関しては歌ってないんです。曲を作ったときに、まだ僕はヘリ墜落事件のことを詳しく把握してなかったのだから、曲の作りとしては俺が現実の沖縄を描写していて、そこに安村がフィクションの沖縄を挟み込んでいくつくりになっている」と答えている。「DUTY FREE SHOPP. x カクマクシャカインタビュー／強烈な衝動、引き摺り下ろせ、怒りの民のドミノ：沖縄で唄い、沖縄で闘う」聞き手・二木信, DeMusic Inter. 編『音の力：沖縄アジア臨界編』インパクト出版会2006年, 10-12頁。
- 35) 2004年8月13日に沖縄国際大学に米軍ヘリが墜落炎上した事件を受けて即座に発表されたこの作品は、無料CDとして配布されたほか、Webサイトからダウンロード出来る。カクマクシャカオフィシャルサイト[<http://akagawara.com/>]；知花竜海（赤瓦レーベル）[<http://kakumakushaka.com/>]。
- 36) 例えば「命は基地ととなり泡瀬」における「泡瀬」という語の挿入を見よ。
- 37) 「宮城明展：深化そして再生へ」画廊沖縄2007年1月。
- 38) 翁長直樹「世界の皮膚」佐喜真美術館「マグマ＜地音＞シリーズI, II, 宮城明展」パンフレット。
- 39) 翁長直樹「境界としての皮膚の隠喩：宮城明個展」『沖縄タイムス』2007年1月29日。
- 40) さらに使用されている画材のアルミ板は、印刷の原版に用いられるアルミ板であり、プリントメディアの持つ意味合いも込められた批評の言葉が選ばれている。
- 41) 新城郁夫「呼びかけの濫喩へ：バトラーのポストコロニアル批評」『現代思想』34-12 (2006年10月臨時増刊), 215頁。
- 42) 新城郁夫「呼びかけの濫喩へ」, 226頁。
- 43) 土井智義「兵士の被傷性を想像すること」『けし風』50号 (2006年3月), 52-53頁。
- 44) 土井智義「『県外移設』論を批判的に考える」『世界』751号 (2006年4月), 182-83頁。
- 45) 土井智義「＜基地＞の現在進行形：那覇新都心を批判的に考える」DeMusic Inter. 編『音の力：沖縄アジア臨界編』インパクト出版会2006年, 53頁。
- 46) DUTY FREE SHOPP. x カクマクシャカ『音アシャギ』SPICE RECORDS INC. (SPRD-1005) 2006年。
- 47) バリバル『アルチュセール』234-35頁。